

香取神社セミナー

宿場町

大澤の歴史を考える

日程 平成15年10月11日(土)・11月22日(土)
12月13日(土)・平成16年1月17日(土)
午後2時～午後4時

講師

鈴木徳治

武州大沢町に 宿場の残像を求めて

私が子供の頃を過ごした、昭和1桁から10年代の半ば頃までの大沢町には、江戸時代宿場町であった頃の名残を示す物が、数多く残っていたように思われる。(勿論、子供の私が意識してそれらを見ていたわけではないが、後年、歴史に興味を持つようになって思い返してみると、あれも、これもとうなずけるものがある。)

その1つに、街道に面して、古びた二階建ての建物で、屋根を瓦で葺いた大きな家がいくつかあった。今それらは取り壊されてないが、古い時代の町並み図から本陣大松屋と、脇本陣若松屋の、旅人を泊めた、旅籠であったことがうなずける。

料理屋が多くあった。料理屋とはいえない、手軽に酒の飲める店も多くあった。芸者置屋も数軒あった。従って、当然見番もあった。

劇場もあった。(映画館と兼用)旧日光街道と県道49号線 野田街道と元荒川に囲まれた一画には遊郭街があり、夜毎にぎわいを呈していた。

記録によると、江戸時代(天保14年)旅籠の数は、大沢町に52軒あったと記されている。現在では、江戸時代旅籠あった頃の屋号で呼ばれている家が数軒数えられるのみである。(大松屋 若松屋 稲葉屋 橋屋 玉屋 住吉屋 等々)これらの屋号が、いつの時代何の営業をしていたときの屋号であるのかは、土地の人でも知らない人が多い。まして新しい住民にとってはなおさらである。

今一つ、宿場町であったことを物語るものに地割りがあつた。街道に面した古い家を取り壊された時、間口に比べて奥行きが長い、細長い長方形の敷地が現れる。街道に面したところは一定の間口で街道に直角に切る宿場町独特の地割りといえると思う。

現在、それらのほとんどが姿を消してしまい、宿場町の面影を探すのは大変難しくなっている。

大沢の地名について

大沢という地名については 此の辺り一帯が江河沢沼であった頃、其の内の大いなる津という意味が いつしか大沢と唱えられるようになったと考えられている。

猫の爪には、開発の残地と考えられる七つ池のことというのが記述されている。

七つ池というのは、内池・外池・浅間池・八郎兵衛池・観音坊池・嘉右衛門池・しじめ池の七つで、昭和の中頃まで現存していた。

内池と言うのは、通称学校の池と言われていた池で1ヘクタール近い大きな池であった。(もともとは名主、江沢家の内池であつたらしい)池の面には菱が一面に浮いていて、シーズンには田舟や盃船で菱の実を採った思い出を持つ古老も多いはずである。

この池は、埋め立てられて現在は第二体育館になっている。浅間池 八郎兵衛池は共にマンションに観音坊池は公園になっている。

昭和30年代後半からの、人口の急増と、バブル期の開発によって、大沢の地名の由来を物語っていたこれらの池が すべて姿を消してしまったことは淋しいことである。

現在の北越谷2丁目に、長元3年(1030)富士山、大沢の影向石を御神体とした浅間神社を勧請したと伝えられている。(このことを大沢の地名と結びつけて考える人もいる)江戸時代此の辺りは松林が広がった、人里離れた寂しい僻地で、何かあったときは人々が集合する場所で、通称浅間山と称されていた。

明治以降は町内の管理に置かれていたが、大正期に原鉄運送店が此の土地を買収し、山正園という庭園に整備した。浄光寺を中心とした梅林と組んで観光地を目指したものと考えられる。

その後神社と境内は、先達をしていた荒井家に譲られたが、都市化の波によって、神社の山は崩され、池は埋め立てられて、マンションや駐車場に変わってしまった。昭和の中頃まで立派な神社があった面影は、現在何一つ残っていない。

日光道中に沿って町屋が形成された時期

大沢町が 奥州道中沿いに町屋を形成していったのはいつの時か、祥らかでないが大沢町の旧家 福井家に伝わる古文書 猫の爪 瓜の蔓 等から考えられることは 江戸時代のごく初期の頃ではないかと推測される。

大沢町の鎮守 香取神社は 鶯後の香取神社を 現在の地(大沢3丁目)に移したものである。その年代は 猫の爪によれば寛永の頃ではないかと書かれている。寛永の頃、(1624-1643)それまでは 鶯後や高畑に居住していた百姓達が 日光道中が整備されるにつれ 往還端へ追々移り住むようになり、町屋を形成していったものと考えられる。承応・明暦の頃(明暦元年が1655)大沢町が 越谷宿に加宿となった頃には、すっかり町屋に建つらなっていたらしい。

(現在の香取神社が、寛永年代に鶯後から移築されたことについては、神社前の案内板にも書かれている。)

日光道中の成立と越ヶ谷宿

関ヶ原によって天下を掌握した家康は、慶長6年(1601)まず東海道の伝馬の制を設け、ついで慶長7年中山道にも伝馬の制をしいた。おそらく、千住 → 越ヶ谷 → 粕壁 → 杉戸 → 幸手の奥州道にも、伝馬制がしかれたのはこの頃であろうと言われている。(当時の奥州道は、越谷町の旧記『瓜の蔓』によると、千住から八条(利根川の自然堤防上を)柿木 別府 四条 南百 と進み、荒川堤を大相模 瓦曾根を通して越ヶ谷に出たとある。ここから荒川を渡り、粕壁 杉戸 幸手の道順を想定したと考えられる。

日光道中が制定された頃の越ヶ谷宿は、現在の越ヶ谷で、大澤町はまだできていない。『瓜の蔓』に中町 会田五郎兵衛 先祖会田出羽義は、天正以前 海野小太郎、信州会田より郎党六家同道にて罷越候大家にて御殿高場に陣屋住居しとあり、越ヶ谷の方が古くから町屋を形成していたと考えられる。

前にも述べたように大澤町は、日光道中が制定されてから、鶯後や高畑に居住していた百姓が、街道筋に出てきて家を構えるようになって出現した町屋である。

従って、町の成り立ちからして、宿場に適するように作られていったと考えられる。宿場の機能には様々な面が考えられるが、宿場の最も宿場的なもの旅籠。天保14年(1843)52軒あったと記録されているが、其のほとんどは大澤町にあった。本陣 脇本陣

問屋場も大澤町にあった。飯盛旅籠22軒も全て大澤にあった。

このことは、町の気風にも感じられるように思われる。よそ者を差別しない。(全然無いわけではないが、農村部や他の市町村に比較して)

流れ者が、留まって定住する者が多い。昭和の初め頃から10年代、宿場時代の名残を留める木賃宿が1軒残っていた。部屋数およそ10部屋ぐらい、宿泊する人々には1晩か2晩の旅芸人。猿回しも泊まった。ある期間 比較的長期に滞在した者に犬殺しがいた。

(犬を捕まえ大房(現在の北越谷)の元荒川近くの林の中で屠殺し、肉にして売りさばいで生活していた。朝鮮半島から渡ってきた家族は、くず屋や日雇いで生活していた。

この木賃宿も、高度成長期には無くなっていた。

子供の頃から、越ヶ谷は商人の町。大澤は 旅籠の多かった町。芸者置屋や遊郭のある町。と言うイメージがあったような感じがする。

食売旅籠屋

食売旅籠屋とは、飯盛旅籠屋とも呼ばれ、食売女 または 飯盛女と呼ばれた特殊な女を置き。旅人らに特別な接待をさせた旅籠である。

幕府は遊女を置くことを禁止したが、なかなか守られなかった。日光道中でも、すべての宿場に飯盛女が居たといっても過言ではない。

千住宿で全盛時代、飯盛り旅籠36軒、宇都宮宿で寛政2年(1790)42軒の旅籠に2名宛置くことを許されていたので84人の飯盛女が居たことになる。

栗橋宿で天保年間(1830-43)飯盛旅籠が21軒、草加宿で18軒、粕壁宿で10軒、越ヶ谷宿の内大沢町が22軒を数え、それぞれが2名宛の女を置くことを許されていた。しかし、いずれの宿でも、定数以上の飯盛女を置いていたのが普通であった。

大沢町22軒の飯盛り旅籠について、大沢町の内、主に下組(下宿)に集中して営業が続けられていたと記述されている。(このことは後に遊郭街になった地域と一致している。)

文化元年(1804)例幣使街道 合戦場宿 食売旅籠一斉取締まり

これは関東取締役出役や幕府諸役人 そのほか宿場の飯盛旅籠なども絡んで、入牢 手鎖 宿預けなどの処分者800人予に及んだという。(800人?)

越ヶ谷宿 大沢町の飯盛旅籠も、過人数抱え、表店並び、などで寛政2年(1790)文政8年(1825)に手入れを受ける。

文政9年12月 越ヶ谷宿 大沢町の旅籠屋62軒のうち飯盛旅籠22軒 粕壁宿は旅籠屋45軒のうち10軒の飯盛旅籠が1軒2人を守るということで、改めて幕府から公認された。(このとき草加宿は許可されず)(公認とは目こぼしか?)

宿入用費用の多くの部分を飯盛り旅籠が負担していたので、金銭面からも無くす訳にいかなかったと考えられる。

北越谷駅の変遷

- 明治32年 現北越谷駅の場所に 駅ができる 駅の名称は『越ヶ谷駅』
大正9年 現越谷駅の場所に 駅ができる 駅の名称は『越ヶ谷駅』
同じ駅名が2つになってしまったので 大澤町の『越ヶ谷駅』を
『武州大澤駅』と改称する (この頃は立派な貴賓室があった)
昭和31年 『北越谷駅』と改称する

参考に記録の抜き書き

宝永4年(1707)	伝馬役	歩行役
越ヶ谷町	120軒半	21軒
大沢町	73軒	5軒
草加宿	120軒半	

寛延3年(1750)

大沢町の総戸数 373軒 伝馬役 歩行役 合わせて63軒

地借 30軒 店借 262軒 寺院 修験 その他 18軒

地借 店借が全体の約80パーセント

天保14年(1843)の越ヶ谷町でも 地借 店借は、約80パーセント

地借 店借でも、表を借りて、旅籠を経営するものもあった。

又、伝馬屋敷の株も変動が激しかった。

天保14年(1843)越ヶ谷宿 戸数 1005戸 人口 4603人 旅籠52軒

文政元年(1818) 百姓旅籠 21軒 地借層の旅籠 26軒

おわりに

『猫の爪』には 街道に面した町割り図が書かれている。『元禄八検地名所 文化九所持之名を記す』と書かれた屋敷割り図を見ると、現在それとわかる家は、ほんの教えるほどしか残っていない。農村部では、開拓の初期から現在まで連なる家が数多くあるのに比べ、町場で何代も続くことの難しさを、如実に教えられた気がしました。

参考文献

福井家文書 『猫の爪』『瓜の蔓』『大澤古馬こ』

本間清利著 『日光街道 繁盛記』

越谷市教育委員会編 『越谷風土記』